



第8157号

2024年9月19日(木)

新冷戦のリアルな本質

エコノミスト 西谷 公明

この夏、ウクライナ軍は、何のためにロシア西部クルスク州へ越境侵攻したのか。キーウの政権幹部から折々に発せられる表明は、「西側パートナー」に宛てた弁明のように聞えてならない。

◆ロシアを試し、アメリカと西側を試す

急襲の隠れた意図が、ロシアを試すと同時に、アメリカと西側を試すことだったことは今や明らかだ。ウクライナ軍は、西側兵器を使ってロシア本土を攻撃するという、ロシアのプーチン大統領が主張する「レッドゾーン」をあざ笑うかのように、やすやすと越えてみせた。

9月10日には、モスクワ州が大規模なドローン攻撃に見舞われた。州内の高層住宅が炎上、損壊し、シレメチェヴォを含む首都モスクワの4空港が一時閉鎖された。

ウクライナは、ロシアによる「核の脅し」が恐れるに足りない「はったり」であることをアメリカと西側に示しつつ、供与された兵器の使用制限を解除させたい意図を隠さない。ゼレンスキー大統領はアメリカと西側首脳に、ロシア領内への長距離ミサイルによる攻撃を認めるよう求めている。

◆現実味乏しい「出口」シナリオ

今のところ、アメリカのバイデン大統領は、回答をあえて留保しているように見える。思い起されるのは、6月に南イタリアのプーリアで開催された先進7カ国首脳会議(G7サミット)だ。

いわく、「力による領土の侵害を許さない」「プーチンのロシアに勝たせてはならない」「ウクライナを支援する我々の団結は揺るぎない」等々。丸テーブルを囲んだ首脳たちは口々に勇ましくそう言って、必要とされる限り、長期的に支援していくことをゼレンスキー大統領の前で約束した。

アメリカと西側の問題は、戦争のこれ以上のエスカレーションを望まないと、誰もが判で押したように言いながら、ウクライナが勝つこと以外に、この戦争を終えるための「出口」を持たないことだ。そして、この2年半、ウクライナ側の粘り腰に押し切られる形で、先端的な戦車や戦闘機、長距離ミサイルなどを次々に供与してきた。

◆越境侵攻の真の狙い

果たして、「核の脅し」は杞憂(きゆう)にすぎないのか？ プーチン大統領に「核を使う勇氣」などそもそもないのか？ だが、そのことが分かるまでロシアを試してしまっただけでは既に遅いというのが、この問題の「リアルな本質」にほかならない。

ところで、越境侵攻の真の狙いが、ロシア最大級のクルスク原子力発電所の占拠にあったとしたらどうだろう。クルスク原発を「人質」に取り、クレムリンの喉元に七首(あいくち)を突き付けて、ウクライナの土俵でロシアを停戦交渉に引きずり込もうとしたのなら…。

真相は定かではない。ロシア政府は、事態の急を国際原子力機関(IAEA)に通報した。8月26日には、IAEAのグロッシ事務局長が調査団を率いてクルスク原発を視察した。ロシア側はウクライナ軍から原発を守るように長い塹壕(ざんごう)を掘った。

かたやそのロシアは、ウクライナ中部のザポリージャ原発を支配下に置いている。核の脅威は現に存在する。その限りで、この戦争は「凍結」するしかないと思う。

(にしたに・ともあき)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003